



る。要するに具体を見通せないというもどかしさがある。そこで教員は自らの授業実践や成績評価基準を「見える化」しなければならない。どうすれば「見える化」を実現できるのか、そのヒントが本書に詰め込まれている。

本書は3つの章からなる。各章の構成比は整っていない。「はじめに」や目次を含めた全127頁に占める各章の割合（章扉やノンブル無しの白紙を含む）は、第1章が約8%、第2章が約72%、第3章が約15%である。このプロポーシオンは、実践的な内容の図書において頻繁にみられるので、取り立てて問題にするには及ばない。

「はじめに」と第1章「新3観点の学習評価を位置づけた中学校地理の授業づくり」は、編著者である吉水氏による著述部分である。「はじめに」では本書の編集方針や構成が平易に述べられ、第1章は学習評価の大切さの説明に始まり、地理的分野の目標と評価基準を示したうえで、前頁右段で触れた学習指導要領における新3観点の要諦が簡潔に整理されている。また、吉水氏がかねてから提唱しているPBL的社会科単元が改めて紹介されている。本稿の紙幅が限られているため、一層深く知りたい読者には本書13頁で触れられている3本の文献の参照をお勧めしたい。

本書の約3/4を占める第2章『『知識・技能』と『思考・判断・表現』の学習評価を中核に位置づけた地理授業プラン』は、若干複雑な構成になっている。すなわち、本章はA、B、Cの3セクションからなり、A「世界と日本の地域構成の授業プラン」は「プラン1」のみで構成される。B「世界の様々な地域の授業プラン」とC「日本の様々な地域の授業プラン」は、それぞれが7つずつの授業プランを提示していて、学習指導要領に明記され教

科書編集の基盤となっている地域区分に準拠して、「世界の諸地域」と「日本の諸地域」の授業プランが個別地域ごとに解説される。

個々の授業プランで扱われた内容を詳述する紙幅は無いので、各々の授業プランが対象としている地域について、総説的なものも含めて列記すると、セクションA：世界の地域構成、セクションB：世界各地の人々の生活と環境、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、北アメリカ、南アメリカ、オセアニア、セクションC：九州地方、中国・四国地方、近畿地方、中部地方、関東地方、東北地方、北海道地方のようになる。これらのうち、セクションBの授業プラン4のみが地域名称だけでなく「アフリカ州の課題を調べ、考え合う」という活動内容に踏み込んだタイトルになっていて若干の違和感を覚える。ここは他の授業プランの記載例に倣って「アフリカ」とした方が統一感を向上できるように思える。

各々の授業プランは、全てが綺麗に様式統一されており、5つの項目が6頁（見開き3組）に格納されていて読みやすい。5つの項目は、1「単元のねらいと評価基準」、2「授業づくりのポイント」、3「単元計画案」、4「授業展開例」、5「評価問題例（ペーパーテスト例）」となっている。

これら5項目のタイトルを一瞥すると、おおむね記載内容は想像できるだろうが、とくに3「単元計画案」は時間経過が記載されていないものの、授業者が試行段階で時程を加筆すれば、そのまま指導案として活用できるよう配慮が行き届いている。また、5「評価問題例（ペーパーテスト例）」は、地図やグラフを活用した、暗記に頼らない良問が多く含まれており、漏れなく《解答例》が添えられていることも利用価値を高めている。ただ、

解答例に続けて《評価の基準》が明記されているのは、15の授業プランのうち5プランに限られる。読者の期待に応えるためには、本書編集の趣旨を鑑みて、全項目において《評価の基準》が欲しかった。それを記す紙幅に余裕のある授業プランも散見され、そうでない授業プランでも工夫次第で《評価の基準》を加筆する紙幅は捻出できるだろう。本書は需要が高くなることが予測されるので、再版の折に是非とも改善をお願いしたい。

余計な心配になってしまうかもしれないが、中学校教員で本書を持つ親の子が試験前に本書を参照すると、事前に試験の設問内容が分かってしまう恐れがある。そういうことを妄想してしまうほど、評価問題例(ペーパーテスト例)には良問が揃っている。なお、第2章では2名の著者が2つの授業プランを書いており、他の著者は各自が1つの授業プランの執筆を担当している。

第3章「『主体的に学習に取り組む態度』の学習評価を中核に位置づけた授業プラン」では、新3観点のうちの2つを扱った第2章を受けて、おそらくは新3観点の中で教師にとっては最も難物になると想像できる3つ目の評価観点が取り上げられる。この「主体的に学習に取り組む態度」の学習評価は、各教員が評価基準を明確化しにくい点に難しさがある。つまり、この観点は「見える化」が図りにくい生徒観察を要するのである。

そういうこともあってか、本章に含まれる3つの授業プラン、つまりセクションB「世界の様々な地域の授業プラン」(1プラン＝世界の諸地域)とセクションC「日本の様々な地域の授業プラン」(2プラン＝日本の地域的特色と地域区分、地域の在り方)では、第2章の各授業プランにおいて5「評価問題

例(ペーパーテスト例)」とされていた項目が、5「評価の手立て(方法・ツールなど)」となっている。なお、セクションAは第3章に存在しない。「評価の手立て(方法・ツールなど)」では、本章に格納されている3つの授業プランそれぞれが、別の評価方法を提案している。

まずセクションBの授業プラン1では、生徒たちが授業前・中・後に学習内容や変化を記すOPPAシートの活用例が示される。これは学習のポートフォリオとして、生徒それぞれの学びの深化を把握するのに適している。

セクションCの授業プラン1では、振り返りシートの活用例が示されるが、これは生徒が主体的に学びの深化を図る動機になるといわれている方法である。評者が2018年4月から2022年3月まで4年間にわたって学校長を併任していた附属桃山小学校でも各授業の最後に振り返りシートをタブレットPCに入力して蓄積する試みが常用されており、それが児童自身による学びの確認で活用されると同時に、教員は児童が入力した振り返りシートを学習評価で積極的に活用していた。

セクションCの授業プラン2では、学習者のパフォーマンスの質を評価するツールとしてルーブリックが示されている。これは、学習到達度の評価基準についての観点と尺度からなる表として高い評価が確立し、教育実践の場で注目を浴びている手法である。

「おわりに」は、編著者の吉水氏が本書全体の振り返りを著している。教員養成フラッグシップ大学に選出された兵庫教育大学の理事副学長として校務に多忙な中、本書のような即時的に使える優れた図書の編集をリードされた編著者に衷心より敬服したい。

(香川貴志 記)